

高校職業学科の教育学の課題

佐々木 享

はじめに—職業学科の教育学の構想の背景

高等学校学習指導要領には、「職業教育を主とする学科」という表現がある。これを短縮して表現したのが高校職業学科で、具体的には、高等学校設置基準（第五条）にいう専門教育を主とする学科のうち、工業、農業、商業、水産、家庭、厚生に関する学科（このような区分を大学科と通称する）の総称である。高等学校設置基準はこれらの学科のほか「商船に関する学科」を掲げている。しかし、商船科は、1960年代にすべて高等専門学校に移行したので、今日では存在しない。ところで、高校職業学科の目的や内実は、特定の職業分野に必要な知識、技能を修得させる教育を学校教育として実施することにある。この点で、家庭に関する学科と農業に関する学科のうちの生活科及びこれを改称した生活科学科は、別の機会にしばしば指摘したように、調理科などごく僅かな例外をのぞくと、成立の由来と実態からみて女子用学科の別称に過ぎない。すなわちこれらはいずれも、職業学科と称すべき実体をもたない。

「高校職業学科の教育学」とは、私の命名である。私は、高校の各職業学科で行われている、ないし行うべき教育に共通する問題を教育的に研究する課題を「高校職業学科の教育学」を名づけてみた。「高校職業教育の教育学」といいかえてもよい。しかし、そうすると職業学科で課される普通教育科目が念

頭から落ちてしまうおそれがある。かりにそういいかえたとしても、その内実は「職業学科の教育学」でありたい。

工業、農業、商業、水産の各学科は、戦前（正確には旧学制下）には工業学校、農業学校などのようにそれぞれ独立した別種の学校であった。（家庭科も、被服関係だけは、戦前には、職業学校という独立した学校であった。職業学校なる学校制度があまり知られていないのは、大ていの職業学校は家政女学校と名のついていたからである。）戦後生まれの学科は、女子用学科としての家庭科と衛生看護科だけである。戦後も、職業教育を行う各学科は、それぞれ、工業、農業、商業など学科ごとに独立の校長会をもち、独自の研究会を組織するなど、互に全く独立した活動をしてきた。今日においても、同じ学科の教師同士の同族意識（？）はひじょうに強い。

この背景には、高校の教員免許状が工業、農業、商業等の教科ごとに発行されること、教員は教科ごとに養成されること、これら各教科間では内容上の差異が著しく、共通性に乏しいこと、などの事情がある。

これらの事情を他面からいえば、工、農、商等の各学科間にまたがった連帯は弱いといえる。まれには強い連帯がみられたことがあった。各職業学科の校長たちが密接に協力して、産業教育振興法を制定せしめたときがそうであった。しかしこれは、例外であったよ

うにおもわれる。文部省の審議会は、中産審の時代には産業教育の名において、理産審の時代になってからは職業教育の名において、職業学科を束ねて扱っている。制度としては束ねられているのに、実態としては大学ごとの独自性が強く、職業学科全体を貫く統一性が弱いわけである。

このほか、職業学科に共通する問題をたばねて検討し、関係方面に要望したりする常設の組織としては、産業教育振興中央会がある。この組織は、実業教育の振興を目途として開催された実業教育五十周年記念の行事を契機に1939年に創設された実業教育振興中央会の後身である。この会が現実を果たしている役割を私はくわしくは承知しない。

I. 「高校職業学科の教育学」の構想

高校の教師（中学校の教師も同じ）は、教科の教師として必要な教育をうけて、教科担当教師として就職する。授業をもたない管理職を別として、教科の授業をもたない高校教師は存在しない。

しかし高校教育は、個々の教科・科目の教育のたんなる寄せ集めではなく、教科のほか特別活動をふくんで、当該の学科、当該の高校としての構造的なまとまりをもっている。この構造的なまとまりをもった高校像が大学で教えられることはほとんどなく、それは高校に就職後に経験を積むなかで形成される。経験を通して形成するにまかされているので、学校ごと、教師ごとの認識の差は大きい。長年の経験をまつのではなく、方法としては意識的、自覚的に、内容としては科学的、論理的に整理しようとするのが高校についての教育学（高校教育論）である。その中でとくに職業学科に固有の問題を中心に整理しようとするのが「高校職業学科の教育学」である。

「職業学科の教育学」などと呼ばないとしても、それに近い実体がこれまでなかったわけではなかった。学校、学科の経営を担当す

る管理職や、それを行政的に指導する教育行政当局の頭のなかには、整理されているかどうかは別として、構想としては存在しているに違いない。私が企図しているのは、管理職のための教育学ではない。そうではなく、管理職や役職についていない教師が職業学科の教育の全体を科学的に見通し、その経営を民主化するために積極的に参加し得るような契機を提供しようとするものである。

ここに大略のべたような意図をふくんだ内容を私は、名古屋大学において講義し、またその講義の要項をメモのかたちで整理したこともある。そのメモは何回か修正しているうちに、本文80ページ程のプリントになった。書物とするにはいかにも未整理であるけれども、何かの参考になるかとおもい、「高校職業学科の教育学」と題して技教研の親しい友人たちの高覧に供したこともある。その内容の目次の大項目は以下のようなもので、これが「高校職業学科の教育学」についての私の構想の骨格である。

I. 高校職業教育の意義とその特殊性

- (1) 高校教育の意義
- (2) 高等学校の組織
- (3) 高校職業教育の特殊性
- (4) 職業学科の地域別分布
- (5) 高校職業教育と職業訓練との関係
- (6) 文部省所管外の職業教育

II. 戦前の実業教育の歴史の概要

- (1) 徒弟養成の形式から学校の形式へ
- (2) 実業学校の歴史の概要
- (3) 夜間の実業学校
- (4) 実業学校の学科課程と教科書
- (5) 実業教科の教員養成
- (6) 中学校、高等女学校の実業教育
- (7) 実業教育50周年の起点について

III. 高校職業教育の発展の経過の概要

- (1) 高校職業学科（職業課程）の成立
- (2) 産業教育振興法の成立(1951)以後

- (3) 高度成長期の高校職業教育
- (4) 高校の学科多様化
- (5) 高校進学率90%時代と高校職業教育の減少
- (6) 1989年の高校学習指導要領改訂と新タイプの高校の模索
- IV. 職業学科の教育課程
 - (1) 高校学習指導要領と学校における教育課程の編成
 - (2) 必修制の教科・科目と選択制の教科・科目
 - (3) 高校の学科の種類、コース制
 - (4) 普通科目と専門科目の構成
 - (5) 学年制と単位制、単位制高校
 - (6) 履修と習得
 - (7) 教育課程表の編成作業
 - (8) ホームルームと学級、習熟度別学級編成
 - (9) 実習の位置づけ
 - (10) 専門科目の教科書
 - (11) 最近の教育課程と単位数
 - (12) 教科・科目の履修方法の多様化
- V. 各学科ごとの概況
 - (1) 農業に関する学科
 - (2) 工業に関する学科
 - (3) 商業に関する学科
 - (4) 水産に関する学科
 - (5) 家庭に関する学科
 - (6) 厚生に関する学科
 - (7) その他の学科
 - (8) コース制
 - (9) 総合学科
- VI. 情報化、ME化と高校職業教育
 - (1) 科学・技術の進歩と高校職業教育
 - (2) 「情報化」、ME化をめぐる教育政策の展開
 - (3) 学校へのコンピュータの導入
 - (4) 情報関連学科の展開
 - (5) 普通教育としてのコンピュータ教育
 - (6) 専修学校のコンピュータ教育
- VII. 職業学科における学習
 - (1) 生徒の学習意欲
 - (2) いわゆる座学と実験・実習（商業科の「総合実践」をふくむ）

- (3) 授業の展開
- (4) 教師の教材解釈
- (5) 技術の思想
- (6) 技術教育と技術史の学習
- (7) 学習の目標と評価
- (8) 公的職業資格と技能検定
- (9) 「新学力観」
- (10) 技能の指導
- (11) 各種の技術教育の方法
- (12) 教具
- VIII. 職業学科生徒の卒業後の進路
 - (1) 高卒者の進路の概要
 - (2) 就職
 - (3) 進学—大学
 - (4) 専修学校
 - (5) 青年の生き方と日本の進路
- IX. 定時制、通信制と技能教育施設との連携
 - (1) 二重通学あるいは連携に関する戦前の経験
 - (2) 連携制度の成立(1961)とその背景
 - (3) 連携制度の拡張
- X. 職業教育の条件整備
 - (1) 教育条件整備の原則
 - (2) 設置者負担主義と国の負担・補助
 - (3) 産業教育振興法
 - (4) 私費負担の問題
 - (5) 安全管理と安全教育
- XI. 高校職業学科の教職員
 - (1) 教職員の構成
 - (2) 教職員の養成と研修
 - (3) 社会人講師の登用
 - (4) 教師のしごと
 - (5) 生活指導
 - (6) 教師の生きがい
- XII. 女子の職業教育
 - (1) 戦前日本の社会における女性の位置
 - (2) 戦前日本の女子教育体系と家事・裁縫教育
 - (3) 戦後日本の男女共学の理念と現実
 - (4) 女子差別撤廃条約と「家庭一般」女子必修制度の解体、再編
 - (5) 女子が学んでいる職業学科生徒の性別構成の問題

(6) 高卒女子の進路の問題

XIII. 就職と職業指導（進路指導）

(1) わが国の労働契約の特殊性

(2) 学校卒業者の就職方法と職業指導の歴史の概要

(3) 職業指導から進路指導へ

(4) 学校教育における職業指導（進路指導）、職業紹介の位置

XIV. 高校職業教育研究の課題

(1) 高校職業教育がかかえている諸矛盾、諸困難

(2) 高校職業教育研究の課題と展望

ただし本稿は、「高校職業学科の教育学」という私の構想を全面的に展開しようとするものではない。そうではなく、編集部のもとに於いて、前述のメモのうちの「高校職業教育研究の課題」といういかにも簡略な部分を、本論にもふれながら、少しく展開してみようとするに過ぎない。

II. 高校職業学科の特徴

1. 学校体系上の高校職業学科の位置

職業学科は学校制度としては普通科と同じく、高校教育とされる。したがって、学校体系上、その卒業生には大学入試資格が与えられている。中等教育として位置づけられているわけである。職業訓練のようなたんなる職業教育ではないという点で、このことがもつ意味は重要である。

2. 専門教科の単位数は30単位以上

いずれの職業学科も当該学科に固有の専門の教科・科目にかなりの時間（単位数）をあてており、これは、普通科と決定的に違う点である。正確に言えば、専門の教科・科目に30単位以上あてる学科が専門学科であり、その専門科目が工業、農業、商業、水産、家庭、衛生看護に属する科目で占められている学科を職業学科というのである。ただし、現行学習指導要領では、専門教科目の一部を普通教

育科目におきかえることが認められている。

3. 実験・実習の重視

学科により多少の違いはあるものの、職業学科の教育課程は大てい、実験・実習がふくまれ、それは、量的にも質的にも重要な位置を占めている。商業学科では商業実践と称する商業活動の模擬実践が行われている。

4. 施設設備が充実している

職業学科には学科に固有の施設設備があり、この点で職業学科には普通科より費用がかかるという特質がある。産業教育振興法とそれによる国庫補助の存在は、職業学科にはお金をかける必要があるという点での社会的合意が成立していることを示唆している。

5. 少人数教育が可能

職業学科の教員定数は、学科ごとに違いはあるものの、おおむね、普通科より多い。このため、少人数教育が可能になる。このことは、意外に知られていないけれども、職業学科の重要な特色の一つである。

III. 現代の職業学科に共通する難題

1. 中学校の進路選択指導の難点

高校の入学者選抜は、一般的に学科単位で行われている。また、職業学科については、学区を設けていない県が多い。職業学科に学区を設けることの得失は、まだあまり検討されていない。学区の有無にかかわらず、職業学科には、一般に学力の低い生徒が集中する傾向が強い。昔からそうだったわけではなく、さまざまな理由で偏差値差別が強化された1960年代以降に顕著となった。

ちなみにいえば、衛生看護科と家庭科（調理科をのぞく）及び農業科のうちの生活科は殆ど女子のみで、他方、工業科と水産科には男子が多く、女子が1名もいない学科も少なくない。また商業科には女子が圧倒的に多いなど、職業学科では性別構成が著しく不均等である。こうした状況は、生徒、親、中学校の教師をふくむ社会一般に見られる強固な性

別役割分業観の反映であって、職業高校の側が意図的につくりだしたものではない。しかし、宮城県などごく一部の県のように、学科ごとに募集する性を指定しているところがある。一部にせよ今日なおかかる措置が容認されているところに、性別役割分業観の根深さを見ることができる。

2. 低「学力」、無気力の生徒が多い

「学力」の低い者が多いこと、当該学科に学ぶことに自覚をもたないいわゆる目的意識の不明瞭な生徒が多いこと、などが各学科の教育を困難にしている。教育運動上の課題という点でも、研究上の課題という点でも、論点が深められていないところに問題がある。

3. 大学進学で不利なことが多い

就職は、一般に職業学科卒の方が普通科より有利である。不況局面ではことにそうである。その反面、大学進学希望者が増加の傾向にある中で、大学入学者選抜の大部分は、豊橋、長岡の両技術科学大学、日本工業大学などのように職業学科卒を優先する若干の例外をのぞくと、一般には、普通科卒業者を基準として実施されているので、普通科卒業者にくらべて、職業学科の生徒は大学進学で不利になっている。これは一般的傾向であり、個々の学校、学科では進学実績をあげている実践もある（永田実践）。個別的な実践はもちろん大切である。しかし、一般的なアーティキュレーション（学校間の接続関係）の問題として解決をはかる必要がある。

IV. 現代の職業学科をめぐる実践上の課題

1. 中学校の進学指導への対処

- ・「いい生徒」をよこしてくれ、だけでは問題は解決しない。それは結果として、「いい生徒」を学校、学科間で奪い合い、偏差値選別を助長するに過ぎない。
- ・当該の職業学科に学ぶことに意義を見出すことのできる生徒を掘り起こしてもらい必要がある。

・中学校の教師は、一般に普通高校出身者であり、特別な事情がない限り、職業学科の機能や実態をほとんど知らないと考えてよい。

・だから、生徒が学ぶべき高校教育を考えるのではなく、高校入試しか念頭にない中学校の教師が、「成績」や偏差値だけで高校を選ばせているのは、ある意味では自然である。

学区が広く、1つの中学校から進学し得る高校があまり多いため、中学校の教師が多く、学校、学科についての知見を得ることを困難にしている。学区の縮小は、職業学科にとっても重要な課題である。

・いわゆる体験学習など、中学生に職業学科の実態を知らせることは意味のあることである。しかし、中学校教師への対処はもっと重要である。

◎最も重要なことは、職業学科の教育のよい点、すぐれた点を中学校の教師たちにアピールすることである。

・高校職業学科のカリキュラムの特色、職業学科では少人数教育を前提とした実験・実習があること、就職する生徒には普通科よりはるかに有利であること、指導によって生徒たちは生き生き学習するようになることなど、職業学科の実態を中学校の教師に知らせる必要がある。

2. カリキュラムの充実

カリキュラムの充実は、高校職業教育の最も重要な課題の一つである。

・私たちの調査によると、自校の教育課程表の作成過程に積極的に参画している教師は意外に少ない。元来、高校の教育課程表は複雑な構造をもっており、他方、高校教師は通常は個々の教科の教師として養成されている。このため、教務部や教務係など特定の役職者、学科主任など当該学科の（専門）教育の全般を見渡す必要がある立場の一部の教師を中心に、教育課程表の骨格の原案が形成されることが多い。

しかし、若干の例外もある。

教務や学科長などの役職者でない教師でも、学習指導要領をよく研究し、高校教育課程の構造の特質を詳しく理解しあるいは理解しようという立場に立つならば、教育課程表の作成過程に積極的に関与することもできる事例が少なからず見受けられた。

◎この点で、職業学科の教師も、自分の教科・科目の問題だけでなく、学校、学科の全体の全体を見渡すことができるように、高校の教育課程の構造を学習し、研究する必要がある。学習指導要領に記載されていない教科・科目を開設する自由度が大幅に大きくなっているなど、教育課程編成が著しく弾力化されている昨今では、このことはとくに重要である。ここで、高校職業学科の教育学についての見識が大いにものをいうことになる。

- ・個々の教科・科目の教育内容・教育方法に精通すること、当該校、当該学科の特質、生徒の実態にそくして、教育計画を立てる必要があることはもちろんである。

3. 教科の実践の充実

高校職業教育の今日における最も重要な課題は、授業実践の充実である。

各学科の基幹科目、ことに学習指導要領にある科目ならば、科目の成立の歴史、その背景、目的などを学習する必要があることはもちろんである。

教科、科目の課題を、自校、自学科の生徒の実態にそくして、生き生きと授業展開できるように構築することがもとめられる。

授業実践についていえば、教材成立の歴史的背景、現実の社会における活用形態についての知見、教材を支える理論上の根拠など、教材についての視野が広く、かつ内容を深く解釈することが、授業の成否を左右する。できない生徒たちだから易しく、などという人がいるけれども、できない生徒たちに教えるのであれば、教師にはよりいっそう深い教材解釈がもとめられ、そこからエッセンスを選びとる力量がもとめられる。

授業の方法、教具の開発にくふうがもとめられることはもちろんである。

◎それを直ぐに教材化すべきだ、というわけではないけれども、個々の科目の内容を成立させ、あるいは改変させた要因としての現実社会（における技術）の変化には敏感でありたいし、またその理論を、常にどん欲に学ぶことも重要である。

実験・実習の場合には、このことは、ことに重要である。

4. 大学進学への対応

今日の大学入学選抜は、前述のように、事実上普通科出身者を前提として行われている。このため、職業学科からの大学進学は著しく不利になっている。

こうしたなかで、近年、職業学科卒業者を推薦入学という方式で積極的に受け入れる大学（学部）が増加している。このような措置をとる大学（学部）の企図には、たんに、進学の手を均等に与えようとするだけではなく、むしろ、職業学科の卒業者のもつよい点を生かそうという趣旨がふくまれていることが多い。少しがんばれば進学し得る大学があるという見通しをもつことは、生徒の学習生活のはげみになる場合が多いので、今日の職業学科の教師は、この種の情報に精通していることも、もとめられている。

5. すぐれた経験、実践の集積を

以上にのべたような点でのすぐれた経験や授業実践は、これまでも少なくない。私たちは、すぐれた教育実践に数多く学ぶ必要がある。この点での問題の一つは、それらの経験や授業実践の記録が散在したままになっていて、意外に活用しにくいことである。今後は、研究や実践を交流する機会をふやすとともに、私たちはこのようなデータを、コンピュータ時代にふさわしく、活用しやすいように集積していく必要があるようにおもう。

（技術教育研究会代表委員。名古屋大学名誉教授）